

此書や加七来りて

是非手紙かきて陸奥

先生に送ってくれよと

しきりにそふたんゆへ

目前にしたゝむ

かしこ

御案内の沢やの加七と申候

ものゝ咄 是は御手下のひしや  
某が聞得所なり。

度々小弟に参り相談

致し候。其故は仙台の国

産を皆引受候て商法

云云の事なり。小弟か手

より金一万両出せとの

こと也。上件を是非

と申相願候間商法

の事は陸奥に任

し在之候得は陸奥さへ

ウンといへは金の事を

ともかくもかすへし。

然る右よふの大金を

スワというて出すものに

てなし。よく／＼心中にも

わかり候よふ陸奥

に咄し致しくれ候よふ

と申聞候所加七曰く いわ

仙台の役人及河内

の郷士ら相会し候

得は加七が自から下坂

と云わけにはまいらす

ゆへ陸奥先生義

早々上京の上右人々に

御引合奉願候との事  
なり。此上よく御考合  
可被成候

小弟か論に竊ひそかに大兄

に言目今御かもつこんり

の丹波丹後の一件

云々大坂四つ橋大仏や門前

御談の事万不可被忘よろず

十分右の所に御心

お御用第一なり。

右のよふ御用心  
先は早々頓首。

十月廿二日

龍

元二郎先生

御本